

# 春日井市福祉に関するヒアリング調査

## 分析結果（概要版）

### 調査の概要

令和8年度末に（仮称）春日井市総合福祉計画を策定するにあたり、対象者及び関係者の実態と意向を把握し、計画改定の基礎的な資料とすることを目的として、福祉関係団体を対象としてヒアリング調査を行いました。

#### （1）団体ヒアリング調査の概要

	対象	目的	ヒアリング実施日
1	老人クラブ	元気な高齢者の活動実態や、地域での役割（居場所づくり）の現状・課題を把握する。	令和7年11月26日
2	認知症当事者	認知症基本法の理念に基づき、本人の意思決定支援や、地域で自分らしく暮らし続けるための具体的なニーズ等を把握する。	令和7年11月17日～26日
3	自立支援相談コーナー	生活困窮や複合的な問題を抱える世帯の現状と、窓口での相談状況を把握する。	令和7年12月25日
4	権利擁護センター	意思決定支援を必要とする成年後見制度等の利用状況などの現状・課題を把握する。	令和7年12月15日
5	当事者団体	障がいを持つ方が地域で生活を送る上での困りごとや、支援ニーズの現状を把握する。	令和8年1月15日、16日、19日
6	事業所（児童・医療的ケア）	児童への支援及び医療的ケアなど専門的な支援を必要とする方の現状を把握する。	令和8年1月7日、14日、2月3日
7	特別支援学校	学校から社会（就労・生活）へ移行する時期における、支援のつながりの現状を把握する。	令和8年1月13日、30日
8	発達障がい者支援センター	診断・療育の状況や、ライフステージを通じた相談支援体制の現状を把握する。	令和8年1月27日
9	春日井若者サポートステーション	社会参画に困難を抱える若者の孤立の実態や、就労支援に向けた現状を把握する。	令和8年2月3日

# 01 老人クラブの活動者の状況

## 老人クラブとは

地域を基盤とする高齢者の自主的な組織。高齢者自らのいきがいを高め、健康づくりを進める活動や、ボランティア活動をはじめとした地域を豊かにする各種活動を行っています。

## 活動者の傾向

### 市老連に所属する老人クラブの数および会員数の推移

クラブ数、会員数ともに減少しています。

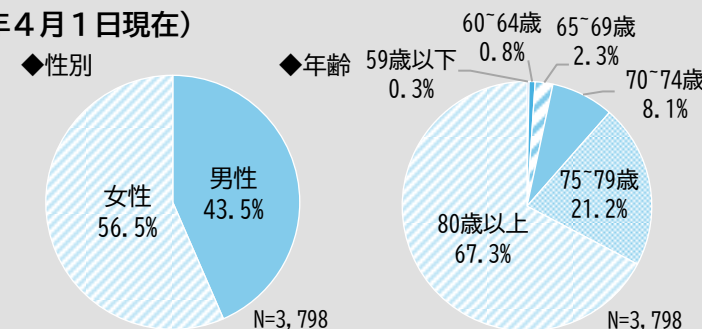
	令和5年度	令和6年度	令和7年度
クラブ数	90	80	78
会員数	4,871	4,023	3,798

※毎年度4月1日時点

### 活動者の性別と年齢（令和7年4月1日現在）

性別をみると、男性と比べて女性の割合が高くなっています。

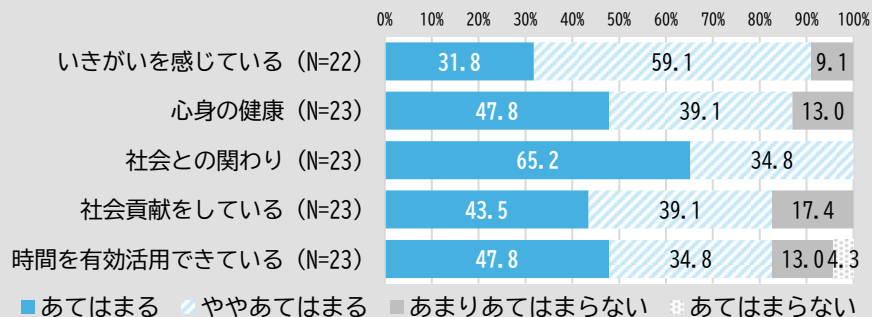
年齢をみると、80歳以上が6割を超えています。



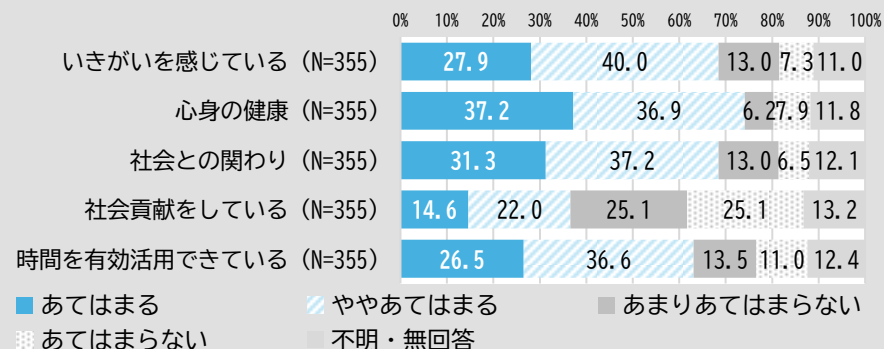
### 老人クラブの活動に参加する中で、感じていること

老人クラブ活動に参加する中で「社会との関わり」を感じている人の割合が高くなっています。

#### ◆アンケート調査結果（老人クラブ参加者）



#### ◆参考 | アンケート調査結果（一般高齢者）



※一般高齢者調査は、老人クラブだけでなく、ボランティアや区・町内会・自治会、収入のある仕事など様々な会・グループに参加する中で感じていることについて回答したものを。

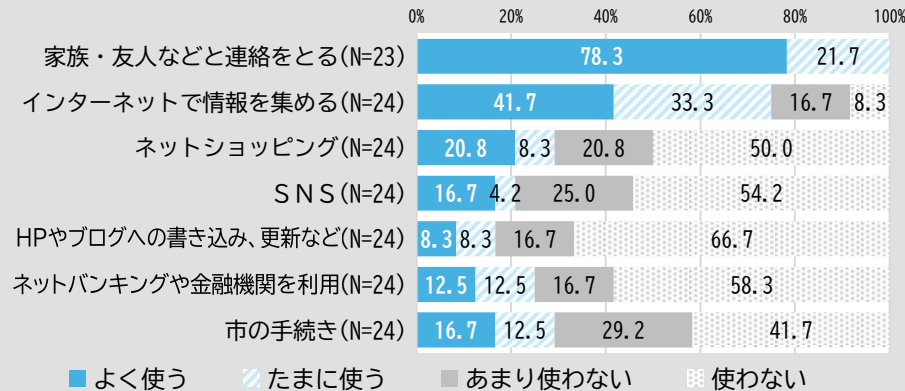
### ◆ヒアリング結果

- ・大会の開催や、様々な活動を通して多くの「出会い」がある。
- ・新たな出会いとして、小学生と外周を掃除するなど、民生委員とも連携した多世代交流も行っている。
- ・役員として、会員のお世話をすることに役割意識を感じる。
- ・色々な経験をしている人たちが集まって話をしたり、聞いたりすることが面白い。
- ・老人クラブに入るきっかけで最近多いのは、町内会と合同で開催する敬老会。入る前は活動内容がよく分からず入りにくかったとの声があった。
- ・老人クラブに入らない理由としては、役員の負担や、他で活動しているなど。70歳からいきいきと過ごせる場所があることは大切だと発信していきたい。

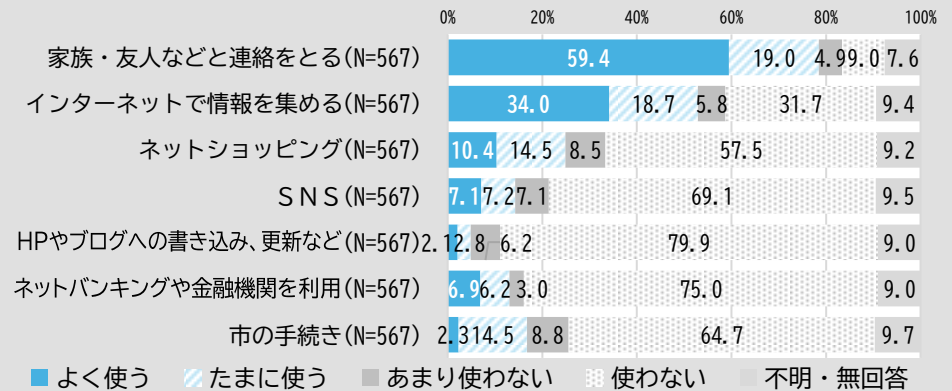
## スマホやパソコンを何に利用しているか

「家族・友人などと連絡をとる」ことにスマホやパソコンを利用している人の割合が高くなっています。

### ◆アンケート調査結果（老人クラブ参加者）



### ◆参考 | アンケート調査結果（一般高齢者）



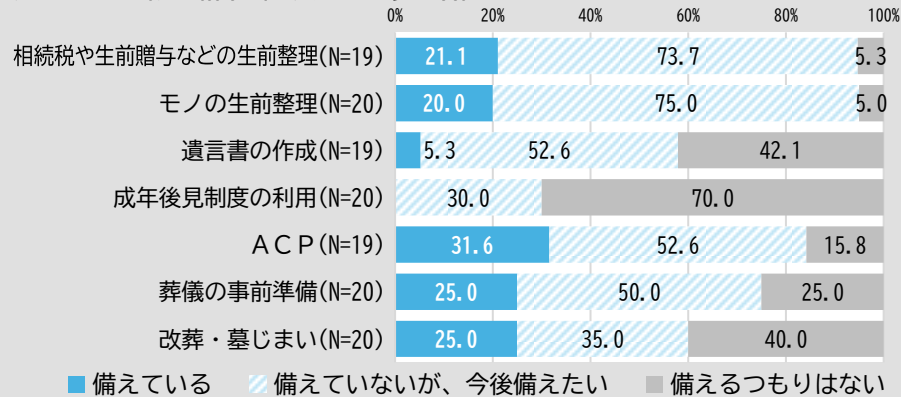
### ◆ヒアリング結果

- ・ほぼ全員LINEでつながっている。老人クラブのLINEのグループを作成し、資料の送付や一斉連絡などを行っている。使い慣れていない人にも同居の家族に協力してもらって、LINEを活用してもらっている。
- ・毎月、講師を呼んでLINEの使い方の講座を開催しているが、受講者は毎月3～4人と少ない。
- ・LINEをインストールしても、あまり普及しない。50名中15名程度しかLINEでつながっていないので、紙と電子の双方で連絡を行っている。うまく活用している老人クラブのようにできるとよい。
- ・LINEの必要性を感じておらず、活用していない。電話で十分。活動予定を年間で作成し、配って説明している。会員からの質問も特になく、現状困っていない。

## 終活（死後の手続きや準備）について、どの程度備えられているか

準備している割合は「ACP」で最も高くなっています。一方で、「成年後見制度の利用」は準備するつもりはない人の割合が高くなっています。

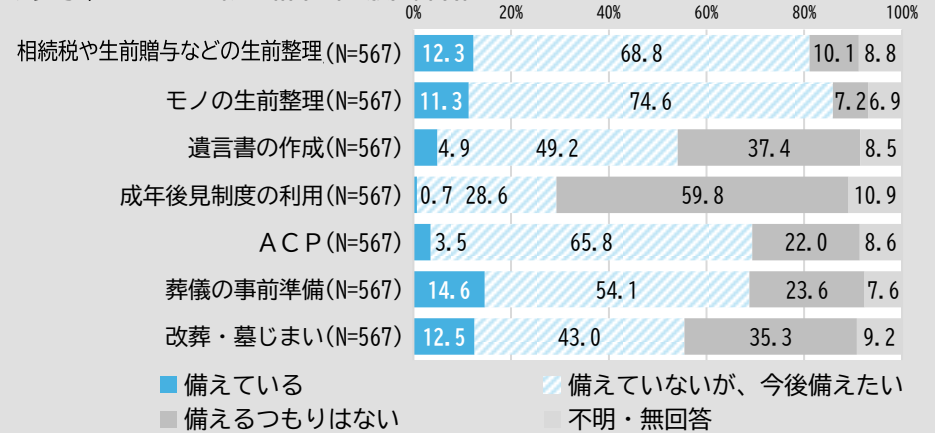
### ◆アンケート調査結果（老人クラブ参加者）



### ◆ヒアリング結果

- ・死後の手続きや準備について、必要性を感じるが、教えてもらう人がいない。
- ・終活は自分のために人生を総括するもの、事前に備えなくてもどうにかなると思ってしまう。
- ・定例会で、エンディングノートの説明や、相続税に関する講座を開いてもらった。今後も開催していきたい。
- ・自分はまだ健康だから、いつかやろうかなと思うだけで、具体的に何か備えることはやっていない。
- ・タンスなどの処分に関心がある。有料での回収もあるが、補助や割引があれば、もっと進んで処分をしようと思える。

### ◆参考 | アンケート調査結果（一般高齢者）



——本日は、よろしくお願いします。Aさん、Bさんはご夫婦で地域のサロンを運営しているのですね

A：月1回開催する地域の集まりの場を運営している。元々、友人同士で互いに介護の悩み相談などで定期的に集まっていたが、近所に暮らす一人暮らしの高齢者や、様子の気になる人たちにもぜひ参加してもらえたらと思い、会を立ち上げた。以前は学校の国語の先生や、保護司などをしていたので、人前で話すことには慣れていた。

B：市や社協から、地域活動を支援する仕組みがあるという話を聞いたことも、会を立ち上げたきっかけになった。

——具体的にはどのような活動をしていますか

A：参加者同士でお話をするだけでなく、療法士の先生を招いて、楽器の演奏や歌を歌ったりしている。地域包括支援センターからの紹介で参加する方もおり、参加者は増えている。講師の先生からの一方通行だけでなく、参加者みんなが交流できることを意識している。また、自身はサロンの月報の作成を続けており、発行数は100号を超えた。活動はこれからも続けていきたい。

——普段の生活はどのようなことをしていますか

A：字を書くことが好きで、日記を書いたり、毎朝、数独をやっている。スマホでYouTube見るのも日課になっている。また、電動三輪車で、夕方に喫茶店で過ごすことも日課である。喫茶店やサロンに行くと、自分のことをよく理解してくれている人がいるから、安心して過ごせる。認知症であるなしに関係なく普通の人でいられること

が嬉しい。

——どこかに出かけたいというよりは、行きつけの喫茶店に待っていてくれる人がいて、自分を理解してくれている場所だから出かけたいということですね。

A：おっしゃる通り。

B：夫は食事も着替えも自分で行えるし、普通の生活をしている。母の介護の時は、自由な時間がなく、辛い思いをすることも多かったが、今は自分の時間もきちんと取れるので、あまり介護が辛いと感じていない。また、電気の消し忘れや水の出しっぱなしも、怒ることなく受け入れている。

——認知症の診断を受けたきっかけは？

A：去年、手術を受け、入院した時に、せん妄の症状や、いつも書けていた字が出てこないなど認知症の兆候があったため、検査を受けたところ、アルツハイマー型認知症の初期段階と診断された。

——診断を受けた時はどんな気持ちでしたか？

A：最初聞いたときは落ち込んだが、病院の先生からの「心配ないよ」の声にはとても安心した。自分は「明るい認知症」だと思っている。デイサービスやサロン活動もまだまだできるし、元気に生きているんだから明るく生きていきたいと思い、プラス思考で過ごしている。また、奥さんにはたくさん支えてもらっている。周りに対する「ありがとう」の気持ちを忘れないでいたい。

B：主人は明るい性格で、認知症の診断を受けても、へこたれず過ごしている。周囲にも、気軽に自分

が認知症であることをよく話している。また、文字を書くことが昔から好きで、字引を常にそばにおいて、好きなことを続けている。

——自分で症状を実感することはありましたか？

A：若い時にはできていたことができなくなった。とっさの判断や、どういう態度をとればいいのか分からなくなる時がある。運転をしていた頃には、一人で出かけたとき、道が分からなくなりパニックになった。また、人の名前やモノの名前が出てこないことはある。孫の名前や、サロンの新しい人の名前覚えられないので、活動の時には、名札を付けてもらっている。一方で、認知症になっても、社会的な活動はできることを、身をもって体感している。

——認知症などを発症すると、ふさぎこむ人が多い。また、人と話すことを嫌がる男性も多い中で、ポジティブな姿勢で過ごしていると感じられる。なかなかそうなりたくてもなれない人が多いが意識していることはありますか。

A：誰も好きで認知症になっているわけじゃない。また、自分は、認知症を特別なことだと思っていない。認知症の症状は、一人ひとり違うし、生活環境や、社会との関わり方も様々であるため、自分の興味のあることや、面白いと感じることに夢中になれる時間を大切にすべきである。自分が歌を歌うことがそういう時間になっているように、認知症であることを忘れて、のめりこめる時間を大事にしてほしい。

——今日は、よろしくお願ひします。普段の生活で、一番楽しいと感じることは何ですか。

C：毎日のショートケアに来ているとき。昔から体を動かすことや、絵を描くことが好きで、ここに来ると、クイズや数独、工作、体操など自分の好きなことができる。認知症であることを忘れられる楽しい時間である。また、自分はショートケアの利用者の中では最年長で、60～80代の他の利用者に、自身の戦時中の経験の話をすることもあり、自己表現の場が充実していると感じている。スタッフも親切で、認知症であることを特別視せず、一緒になって考えてくれる。

——認知症であることを周囲の人は知っていますか。

C：認知症であることを隠していない。日常生活において、近所や友人に話している。周囲もすんなり理解してくれており、話せてスッキリもした。昭和40年代、母が認知症を発症した頃は、世間的に病氣のことを公表できる環境ではなかった。

——診断を受けたきっかけは。

C：買い物の帰り道に、気が付いたら車で歩道を走行していたり、いつもなら迷わない場所で、どこを運転しているか分からなくなったりした。他にも善悪の区別が付かなくなることだったので、内科の

かかかりつけ医に相談したところ、精神科がある医療機関を紹介された。

——医療機関の受診を勧められた時はどのように感じましたか。

C：精神科に対してあまりいいイメージがなかったもので、最初は少し抵抗があった。普通の生活をしていたはずだったのにと、ショックだったが、周りにも認知症の人がいたので、ついに自分にも来たかとも思えた。

——普段生活をする中で、症状の自覚はありますか。

C：物忘れは多い。お風呂で自分がどこを洗ったか分からないなど、瞬時に忘れてしまうことがある。

——認知症の診断を受けてから、気持ちの変化を感じることはありますか。

C：認知症であることを伝えることによって、周りから助けてもらえることに、心から感謝の言葉を素直に口に出せるようになった。バスや電車など、周りの人に助けをもらう場面もあるので、素直に頼ろうと思えるようになった。

——生活を営む上で障壁と感じる場面はありましたか。

C：車に乗れなくなった時は辛かった。感情のコントロールができなくなり、大きい声を出したり、怒鳴ったりしていた。病

院の先生からは、認知症の症状の一つだと言われた。足を奪われることは、非常に制約がある。車で通っていた水泳教室に代わって、送迎付のショートケアに通うようになったが、ショートケアに出会うまでは、かなり辛かった。

——行政に求めることはありますか。

C：認知症になった時、自分は認知症について全然分かっていなかった。市がどうしているのか、自分も家族も知らなかった。行政側から敷居を低くして、認知症のことを知るきっかけづくりをしてほしい。行政が制度や仕組みを作っている、橋渡しがないと感じることもある。認知症になる前から、認知症がどういう病氣かを知っておくことが大事だと感じている。

人間ドックや、任意で受けられる健診の中に、認知症の健診を追加してみてもどうか。早い段階から認知症を身近に思ってもらいたいので、若い人たちにも受けたい。もっと認知症が生活の中であたりまえの馴染みあるもので、接しやすくなれば、認知症に対する周囲の理解も深まるのではないかと。認知症はあたりまえの病氣であり、特別なことではないと、自分が認知症になったからこそ実感している。医療関係者や行政の言葉や施策は、頼りになる。行政には、認知症を身近な病氣だと思える社会をつくるために、頑張ってもらいたい。

——本日は、よろしくお願いします。はじめに、医療機関に通ったきっかけは何ですか。

E：物忘れが多くなったと家族から言われたことがきっかけ。最初は気にしていなかったが、気軽に検査してみようと思い今年、受診をしたところ、アルツハイマー型のMCI（軽度認知症）と診断された。

——具体的にどんな物忘れがありましたか。

E：ものを置いたことを忘れたり、ドアの開けっ放しや、電気つけっぱなしがあった。

——奥様から見て、気になることはありましたか？

F：びっくりするような物忘れはなかった。調べて何か分かればと思って検査を勧めたが、まさか軽度認知症だとは思わなかったので、「なんで？」という気持ちはあったが、治療は早ければ早いほどよいし、治療をしていけば、発症するのが遅くなると聞いて、検査をしてよかったと思っている。

——最近はどのような生活をしていますか。

E：軽度認知症の診断を受けたことや、仕事を退職したこともあり、4月から市内の自然保護活動などを行うボランティアを始めた。入会時の面接では、代表の方に「軽度認知症になり、社会参加が大切だと思ったので活動に参加したい」と伝えた。月1回のつもりが、今では月3～4回参加していることもある。また、元々昔からウォーキングが好きで、一日1万歩近く歩くこともよくある。今でも、歩きながら野鳥の撮影や花の撮影も楽しんでいる。

F：ボランティア活動の際に、相手の話していることが聞こえづらいことは多少心配している。また、今後もし、認知症を発症したらどうしようという不安はあるが、転勤族で、昔からこの場所に住んでいるわけではないので、ボランティア活動を通して友人ができればいいなと思っている。外に出たり、友達付き合いが大切という話を聞いて、今後、積極的に活動していけたらいいなと思っている。

——診断を受けたここ1年ほどで、生活の変化や、困ることはありましたか。

E：耳が遠いこともあるが、単語がうまく聞き取れないことがある。相手の言っていることやテレビの内容が分からないこともある。一人でテレビ見る時は、ヘッドフォンをすることで、普段通りドラマも楽しめている。

——ボランティア活動やウォーキングなど、やりたいこと・やれることに前向きに取り組んでいるのですね。これからやってみたいことはありますか？

E：ボランティア活動では、ホームページ関係を担当しており、日々の活動の記録を載せている。今後はもっと編集や投稿に力を入れて、対外的に発信していきたい。ボランティア活動の仲間はパソコンが若手な人も多いので、自分を中心となり頑張りたい。

F：楽しく続けられることが一番だと思っている。また、主人は、細かい作業も得意で、母が亡くなった時には、相続などの手続きを全部やってくれて助

けられた。

——当事者の方や、ご家族の立場で、市に要望などはありますか。

E：認知症の方が働くカフェでは、認知症の理解を深める目的で、注文を間違えても、お客さんを含むその場の全員が状況を理解している。そういった助けてもらいながら、受け入れてくれている環境がたくさんあるとよい。認知症は特別なことではない。認知症になったからと言って家の中にふさぎこんでしまうのではなく、みんなで誘い出すような動きが地域で広がってほしい。

——認知症の診断を受けた人の中には、自分の病名の事を隠したい人もいます。Eさんは周りには打ち明けていますか？

E：昔からの親しい友達には話している。人に話すことに対して、あまり抵抗はない。ボランティア活動の代表の人には軽度認知症であることを伝え、最近、他のボランティアの人にも伝えた。

F：周囲からの見られ方が気になるので近所の人にはあまり言いたくない。

——最後に伝えたいことはありますか？

E：四十代の頃から、長時間考え事をしていると、頭痛くなることがあった。病院を受診し、診断を受けて、点滴を始めてからそれがなくなった。今思えば、兆候の一つだったのかなとも思う。40代～50代の若い世代の人には、早めに認知症検査をしてほしいと伝えたい。早めに発見できて、治療を開始できたことがよかったと感じている。

## 03 自立支援相談コーナーへの相談者の状況

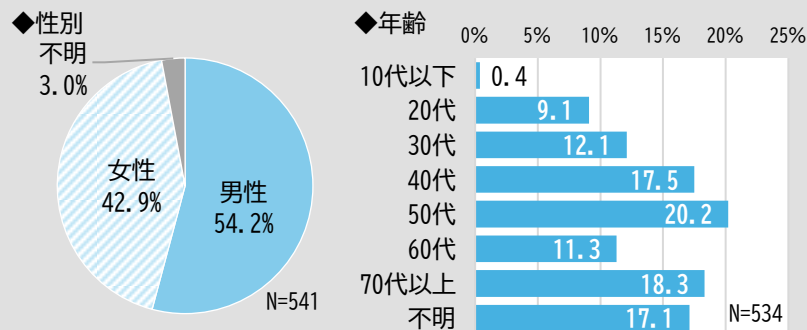
### 自立支援相談コーナーとは

生活や仕事などで困っている人や、困窮するおそれがある人に対し、専門の支援員が自立に向けた相談支援や家計改善支援、住居確保給付金の申請支援などを行っています。

### 利用者の傾向

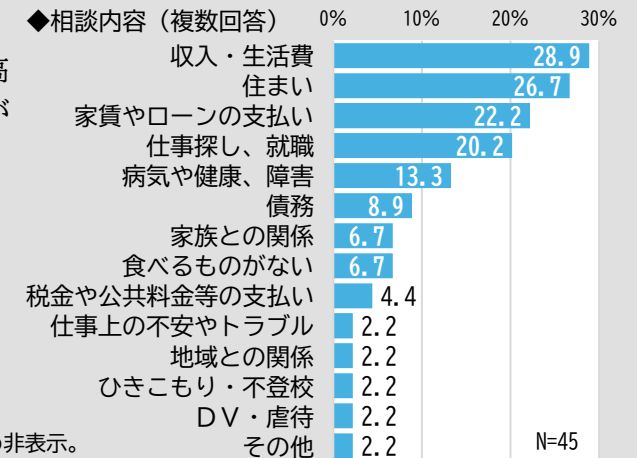
#### 新規相談者の性別と年齢（令和7年度）

性別をみると、男性が54.2%、女性が42.9%となっています。  
年齢をみると、50代が20.2%と最も高く、次いで70代以上が18.3%となっています。



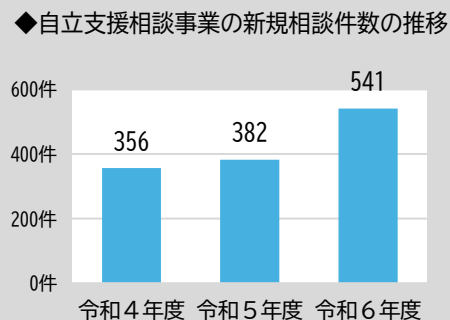
#### 新規相談者の主な相談内容（令和7年度）

相談内容をみると、「収入・生活費」が28.9%と最も高く、次いで「住まい」が26.7%となっています。



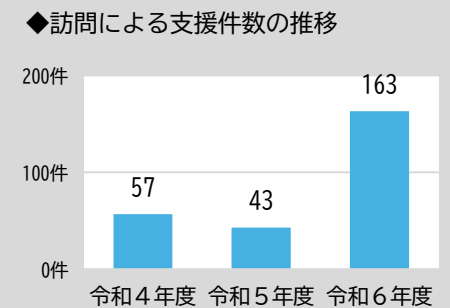
#### 自立支援相談事業の状況

自立支援相談事業の新規相談件数は増加傾向にあり、令和6年度で541件となっています。



#### 訪問による支援の状況

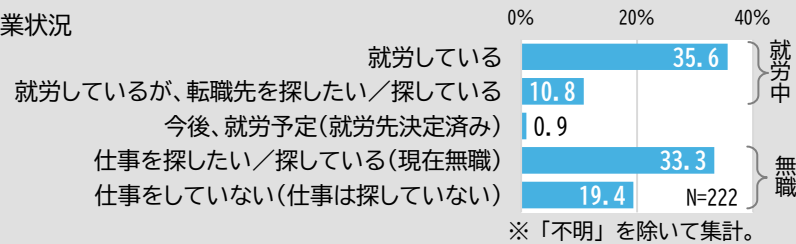
訪問による支援件数は、令和5年度から令和6年度にかけて大きく増加し、163件となっています。



## 新規相談者の就労状況（令和7年度）

就労状況をみると、『就労中』が46.4%、『無職』が52.7%となっています。

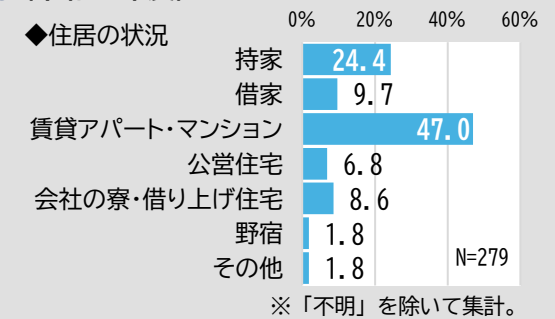
### ◆就業状況



## 新規相談者の住居の状況（令和7年度）

住居の状況をみると、「賃貸アパート・マンション」が47.0%と最も高く、次いで「持家」が24.4%となっています。

### ◆住居の状況



## 利用者の状況

### ◆ヒアリング結果

- ・収入があっても、暮らしていくためのお金が足りない人が多い。
- ・生活保護の受給条件を満たす人もいるが、車の処分を嫌がったり、生活保護への偏見から拒否する人もみられる。
- ・外国人からの相談も多い。一方で、外国人特有の相談は多いわけではない。
- ・「困っている」を発信できない人が多い。本人でなく周りや相談支援機関が困って相談に来ることもある。
- ・相談者の困りごとの要因は、「①お金がない」「②住む場所がない」「③仕事がない・変わらない」であることが多い。

#### ①お金がない

- ・家計管理ができない。日常生活自立支援事業の対象外だったり、支援内容が本人の希望とマッチングせず訪れる相談者もいる。
- ・仕事が続かない。障がい者手帳取得はしていないが、軽度知的障がいの疑いのある人たちもいる。
- ・緊急に食料を現物支給することもある。

#### ②住む場所がない

- ・身寄りのない人や、派遣業で職を転々とする若い世代もいる。
- ・家賃が払えない相談が多い。住み込みで働ける仕事（警備業など）を提案することもある。
- ・出所後の支援に関わることはある。
- ・介護施設は入居費用が高く入所へのハードルが高い。費用が安い障がい者のグループホームに64歳までに駆け込みで入居するケースもある。
- ・家賃の安い市営住宅は周辺環境が不便で入居を辞退する人も多い。

#### ③仕事がない・変わらない

- ・過去に未払いがあり、携帯電話が契約できず、職が探せない。
- ・日払いの仕事から抜きたいが、生活費のために辞められない。
- ・ひきこもっている家族が心配で働きに行けない。
- ・精神的な状態が不安定で、求職活動に踏み出せない。

## ひきこもりの相談に関する状況

### ◆ヒアリング結果

- ・親が心配して相談にくることが多い。対象者は30～60代。
- ・相談があれば、訪問を行っている。訪問をしても、なかなか顔を合わせるところまで行くことは少ない。
- ・ひきこもり状態の人が有する課題は様々であり、社会とのつながりやそのニーズ（働きたい、地域とつながりたい）も人によって異なる。
- ・現時点で経済的に困窮をしている人は少ないが、親亡き後は困窮のおそれがある人は多い。

## 04 権利擁護センターへの相談者の状況

### 権利擁護センターとは

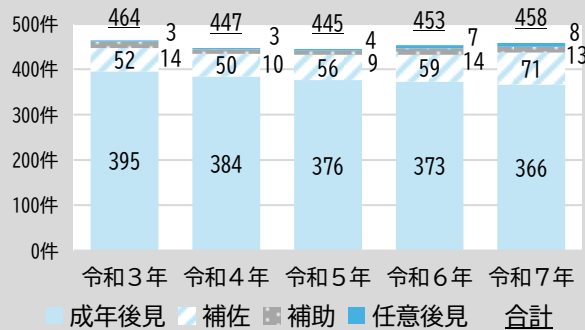
認知症や障がいなどにより判断能力が不十分な人の権利や財産を守るため、成年後見制度に関する相談・利用支援、制度の啓発、市民後見人の育成などを行っています。

【中核機関の4つの機能】 ① 広報機能 ② 相談機能 ③ 成年後見制度利用促進機能 ④ 後見人支援機能

### 成年後見制度に関する状況

#### 成年後見制度の利用者数 ◆成年後見制度の利用者数の推移

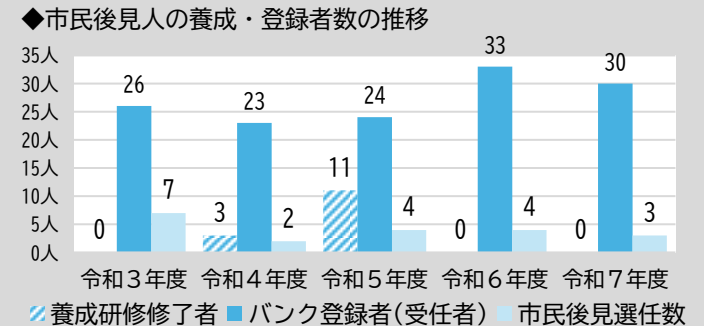
春日井市における成年後見制度の利用者数は、450～460人台で推移しています。



※令和7年度のバンク登録者、市民後見選任数は8月末時点

#### 市民後見人の養成・登録状況

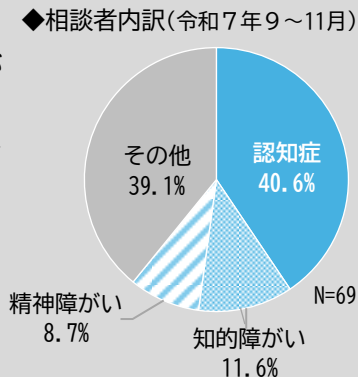
市民後見人の養成・登録者数は右のとおりです。バンク登録者は20～30人台で推移しています。



### 相談者の傾向

#### 相談者の内訳

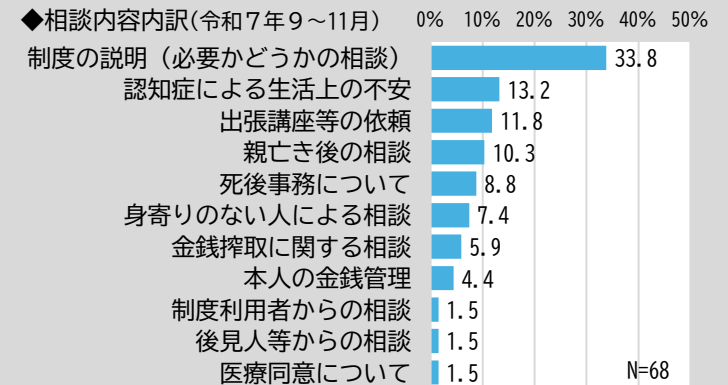
相談者は、認知症の方が40.6%、知的障がいのある方が11.6%、精神障がいのある方が8.7%となっています。



※「その他」は家族からの相談や出張講座等の依頼。

#### 新規相談における相談内容

相談内容をみると、「制度の説明(必要かどうかの相談)」が33.8%と最も高く、次いで「認知症による生活上の不安」が13.2%となっています。



## 相談者の傾向

### ◆ヒアリング結果

- 1 本人や親族より、支援機関からの相談が多い。
- 2 何から始めればよいか分からない市民が多い。
- 3 障がい者の保護者が、親亡き後や 8050 問題を心配し、相談に来ることは多い。
- 4 医療機関にかかる割合が多い 70 代以上になると終活への関心が高まり、老人クラブ、サロン、地区社協などからの出張講座の依頼が多い。
- 5 終活で困っていても、お金がかかる（100～200 万）ことをハードルに感じ、利用に至らない人が多い。
- 6 市民後見人の申立件数は増加傾向にある。
- 7 入退院支援で判断能力が固定される前の患者（グレーゾーン）をだれが支援するのか、医療同意や緊急時の対応などで困っている。

## 05 当事者団体の状況

### 【ヒアリングの対象】

- ・春日井市肢体不自由児・者父母の会
- ・春日井市手をつなぐ育成会
- ・春日井地域精神障害者家族会むつみ会
- ・春日井市聴覚障害者福祉協会
- ・春日台特別支援学校 PTA

### 障がい当事者団体とは

障がいのある人自身やその家族が主体となって運営し、障がいのある人の権利擁護や社会参加の推進、共生社会の実現を目指して活動する団体。

### 当事者の方からみた状況

#### 将来を見据えた支援について

- ・障がいのある子どもは預けておけばよい、ではないと思う。学校にも放課後デイサービスが送迎に来るので、先生と保護者のつながりもないし、保護者同士のヨコやタテのつながりもない。
- ・福祉サービスを利用して、18歳までにある程度トレーニングが出来れば、自立できる部分もあると思うが、今は福祉サービスで守られ過ぎて、経験したり習得したり失敗したりする機会が奪われているようにも感じる。福祉漬けになってしまっている。
- ・相談支援員と、その子どもが自立することを目標に掲げ、訓練していくことを意識してサービスを利用していくことが大切。相談員が親子を導いていけるとよい。
- ・相談員に対して、しっかり研修を行って、適切な利用に繋げていくべき。
- ・ちゃんとした療育を行っている事業所の情報を提供してほしい。

#### 就労について

- ・一般就労が福祉就労か2択でなく、障がいのある人の発達特性や身体機能の状況等に合わせた働き方ができる環境を整備してほしい。障がい者のやりがい向上につながる環境整備を求めてほしい。
- ・障がいがあってもできることはたくさんあるということを知って、雇用や就労を見直してほしい。

#### 障がい理解など

- ・小中学校の福祉教育でも、当事者や家族の話を書く機会など設けられたらよい。障がい理解には、小さい頃から一緒に過ごす環境が大切。
- ・春日井まつり等での体験や、講座を継続していきたい。
- ・企業などにも人権方針を明文化し、人権尊重のきっかけにしてほしい。
- ・銀行で口座開設をしようとした際、本人との面談と書類記入が必須であり、親のサポートは不可ということがあった。今後親のサポート無しでしか口座開設出来ない金融機関が増えてきたらと考えると不安。
- ・予防接種の予約の際に「障がい」と伝えると断られるケースがあった。
- ・コロニーに行ったらと案内されるが、コロニーでも年齢が大きくなると地域の病院を探すように促される。今後受け入れてくれるところがあるか不安。

#### 福祉サービスについて

- ・事業所で高圧的な対応をされた。職員も一生懸命だと思うが、特性を理解してほしい。
- ・医療的ケアを対応できる事業所が少ない。ショートステイが思うように取れない。
- ・ヘルパーや訪問診療が、夕方の時間でもお願い出来ていたのが難しくなっている。時間をずらせば可能なのだろうが、本人の送迎や家族の仕事を考えて難しい。

### 情報提供や相談について

- ・計画相談や支援センターなど相談窓口は充実してきているが、計画相談待ちは引き続き問題となっている。計画相談の人が市との間を仲立ちしてやり取りしてくれるが、伝書鳩のようになっており、こちらの気持ちが伝わっているのかと思うときがある。
- ・8050問題、ひきこもりで未受診、老障介護、生活困窮、成年後見など制度の網から漏れてしまうような困難事例の相談がある。
- ・相談のニーズは多様化している。一般的なことはネットで知れるようになった。
- ・オンラインで情報発信や相談受付できると、アプローチできる層が広がるのではないか。

### 交通について

- ・交流や情報交換のため、公共施設へのアクセスを考慮してほしい。
- ・公共施設を回るようなバスがあるとありがたい。

### 将来の居場所について

- ・重度の人のグループホームが少ない。夜間に看護師が配置されていないところは、怖くて預けられない。看護師不足がある。
- ・送迎が無いと事業所に通うのが難しく、親が高齢になると通えなくなる。
- ・就労継続支援B型に通っている人が高齢になり生活介護に移行したりした場合、生活介護の事業所は足りるのか不安。

### 災害について

- ・在宅避難になってしまうと思うが、その場合に孤立してしまわないかが不安。
- ・要配慮者名簿に登録しているが、通知が来ただけで民生委員や町内会の人実際に来ることなどはない。地域に障がい者がいることを知っているのか疑問。
- ・避難所の環境を整えてほしい。

## 06 事業所（児童・医療的ケア）の状況

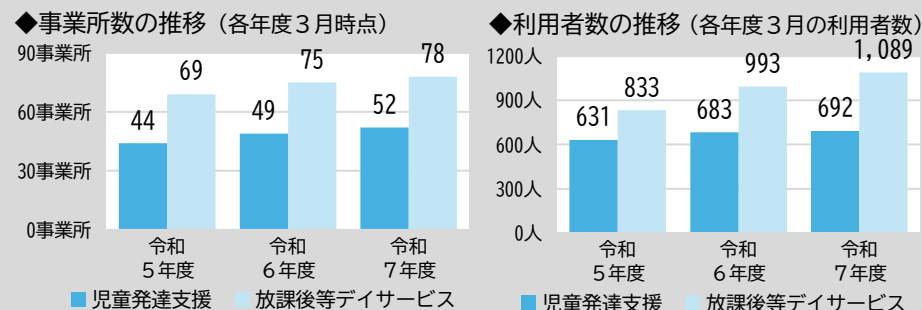
【ヒアリングの対象】

- ・心の泉 生活介護みらい
- ・発達支援ルームくまたん
- ・プライマリーすてっぷ

### 障がい児福祉サービスの状況

#### 事業所および利用者数の推移

児童発達支援事業所及び放課後等デイサービスの事業所数・利用者数は、ともに増加傾向にあります。



### 医療的ケア児・者の状況

#### 医療的ケア児・者の把握

令和5年度、7年度に医療的ケア児者の実態調査を行ってます。

また、令和7年度に医療的ケア児・者を対象とする障がい者生活支援センターを設置しました。

◆医療的ケア児者の実態調査の回答数

	令和5年	令和7年
回答数	59件	85件

障がい者生活支援センターのない  
相談件数

20件(うち児16件)※令和7年12月現在

※医療的ケアとは

人工呼吸器（レスピレーター）管理、気管切開部のケア、酸素吸入、痰（たん）の吸引、ネブライザーによる吸入、中心静脈栄養、経管栄養、導尿、インスリン注射など、日常的に必要な医療的行為のこと。

### 利用者の状況② 事業所から見た現状・課題

#### 計画相談について

- ・児童のサービスを全然知らない人もいる。
- ・家庭訪問、親との面談、事業所でのモニタリングなどちゃんとしたうえでたてられた計画もあれば、コピーペーストのような計画もある。
- ・保護者だけでなくこどもの視点に立って、計画を立てられるとよい。
- ・計画相談員を急に増やすのは難しいので、自らより適切なセルフプランが立てられるような支援や、チェック機能があるとよいのではないかな。

#### サービスの質

- ・事業所の中をあまり見せてもらえない、支援の内容がよくわからないという相談もある
- ・心構え、接遇、実際のケアなど、よい事例は研修などで共有されるとよい。

#### 地域の通う場

- ・学童やなかよし教室と併用している児童もいるが、利用を勧めても「うちの子は受け入れてもらえないと思う」といわれる保護者もいる。
- ・事業所に通ってればよい、ではない。園や学校、家庭などでの生活の底上げ、生活の力をつけるのが大事。

### 保護者のビジョン

- ・ 選択するのは保護者。保護者が「かしこく」なるのが大事。
- ・ 真剣に療育を考えている保護者もいれば、安くて済む習い事感覚の保護者もいる。
- ・ 療育に通ってれば、放課後等デイサービスを使わなければいけない、使って当然と思っている保護者もいる。
- ・ 事業所と学校の連携は基本ない。お母さんにこどもの状況を適切に学校等に共有してもらおうのが大事。
- ・ 福祉と切れてしまうのが不安で、とりあえず継続している保護者も多い。お母さんの安心が大事。

### 保護者同士のつながり

- ・ 保護者会のようなものは時代的にもあまり望まれていない。
- ・ 情報共有や、OBとの相談会、交流会などそれぞれ開催。OBの声など聞くと、安心につながる。

### 医療的ケアを必要とする人の生活について

- ・ 特に看護師は人手不足。医療的ケアは専門性が高く、理解がないとできない。新卒でいきなりできる業務ではない。5年後、10年後を思うと知識やノウハウを伝えていきたい、人材を育てていきたいが、なかなか人がいない。
- ・ レスパイトは、コロナの時期よりはとれるようになったが、医療機関も人手不足である。
- ・ 日中支援型や医療的ケア対応のグループホームなども新しいところが増えてはきたが、夜間も看護師がいるところはなく、医療的ケアや重度障がいの人を安心してあずけられるところがない。看護師の力量の差もあるので、看護師さえいればよいわけではない。
- ・ グループホームへの入所ではなく、在宅支援や在宅レスパイトを利用した生活も選択肢となってくる。

## 07 特別支援学校の状況

### 特別支援学校とは

学校教育法に基づき、視覚障がい者、聴覚障がい者、知的障がい者、肢体不自由者又は病弱者（身体虚弱者を含む。）に対して、幼稚園、小学校、中学校、高等学校に準ずる教育を行うとともに、障がいによる学習上または生活上の困難を克服し自立を図るために必要な知識技能を授けることを目的に設置される学校。

### 特別支援学校の状況

#### 児童生徒数（令和7年5月1日）

愛知県立春日台特別支援学校の総児童生徒数は278人、愛知県立小牧特別支援学校の総児童生徒数は115人となっています。

##### ◆愛知県立春日台特別支援学校

	幼稚部	小学部	中学部	高等部	合計
児童生徒数	5	110	72	91	278

##### ◆愛知県立小牧特別支援学校

	小学部	中学部	高等部	合計
児童生徒数	54	37	24	115

### 特別支援学校からみた現状・課題

#### 進路、卒業後の支援

- ・お金を使えば卒業はできるし、高卒の資格は得られるからという理由で、専門学校に進むこどももいる。今までは特別支援学校に来ていたであろうこどもの選択肢が増えた一方で、支援学校に来る生徒は重度化している。
- ・高校卒業後3年はフォローする仕組みがある。
- ・福祉とつながっているこどもで、途方に暮れているようなケースはほとんどない。
- ・一般就労や就労支援に進んだこどもで、辞めてしまう人が多い感覚がある。本当は辞めてから支援などにつながるのではなく、辞める前からつながって、ケース会議などでできればよい。
- ・卒業後も切れ目のない支援が大事だと思う。親の支援、事業所のスキル向上などいろいろあるが、いろいろな関係機関が関わって支援することが大事ではないか。
- ・保護者も障がい者自身も高齢化してくる。病気や障がいがあっても生きられる体制、受け皿があると安心できる。

#### 保護者のビジョン

- ・放課後等デイサービスはじめ、サービスについての保護者の希望も預かりでよいという人から、しっかり療育してほしいという人までそれぞれである。
- ・将来（卒業後）について、考えられていない、まだまだ先の話で当面の生活で精いっぱいという感じの人も多い。
- ・進路指導、実習ということになっていくが、事業所との契約は保護者なので、保護者が何もわかっていない、丸投げ状態では困ってしまう。

### 地域との交流、インクルーシブ教育

- ・行きたい気持ちはあっても、そもそも行事を知らない、あるいは行く足がないということもある。
- ・先日、同窓会を行ったところ多くの生徒が参加した。通っていた学校なので参加しやすきなどもあったと思うが、つながりや仲間を求めていると思う。
- ・地域の学校との交流も行われているが、特に小中学校は障がい者のお世話という感じになっている。地域の学校にも特別支援学級はあるが、普通級と分けられてしまっている。共生の体験を醸成する機会を奪われていると思う。
- ・確かに特別支援学校の体制は手厚いが、先生と子どもとマンツーマンのような形になってしまう。地域で受け入れてもらえる子どもは、地域で同級生などに関わるのが大事ではないか。高校も、定員割れしているところもあり、受け入れしてもらえないかと思う。
- ・放課後等デイサービスを卒業した後の居場所は課題となっている。
- ・地域との交流や体験の中で、適応力を身に付けてほしい。

### 放課後等デイサービスなど、福祉サービスについて

- ・いろいろな事業所があり、療育に特化した事業所から預かりレベルの事業所まで様々。
- ・適切な評価と相談支援で、事業所の強みに合わせて保護者が選択できたらよいのではないか。
- ・事業所の中には、言葉や態度が乱暴だったり、高圧的なのところもある。
- ・以前に比べれば、サービスや通う場は充実している。自閉傾向が強い子どもが利用が続かなかったり、通う場に困っている印象がある。

### 発表の場について

- ・作品を飾るだけでは、作成した生徒の人物像を知ってもらうのは難しい。実際に出向いて、つくったものを販売する機会があるとよい。
- ・売る場がない。地域の場で日々できる環境があるとよい。マルシェのようなことができたらよい。
- ・福祉の集いなどのイベントの参加者は身内が多く、一般の参加は少ない。
- ・春日井まつりのようなイベントに、障がいのある人も参加する形がよいのではないか。

## 08 発達障がい者支援センターへの相談者の状況

### 発達障がい支援センターとは

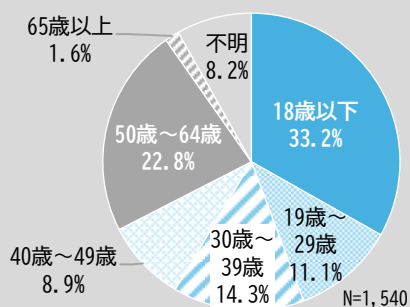
発達障がい者支援センターは、発達障がい児（者）への支援を総合的に行うことを目的とした専門的機関です。

### 利用者の状況① 相談の状況

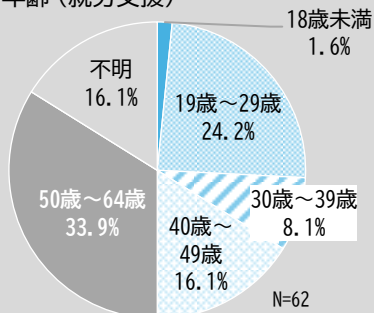
#### 相談者の年齢

相談者の年齢について、発達支援では「18歳以下」が33.2%と最も高く、次いで「20歳～64歳」が22.8%となっています。就労支援では「50歳～64歳」が33.9%と最も高く、次いで「19歳～29歳」が24.2%となっています。

#### ◆相談者の年齢（発達支援）



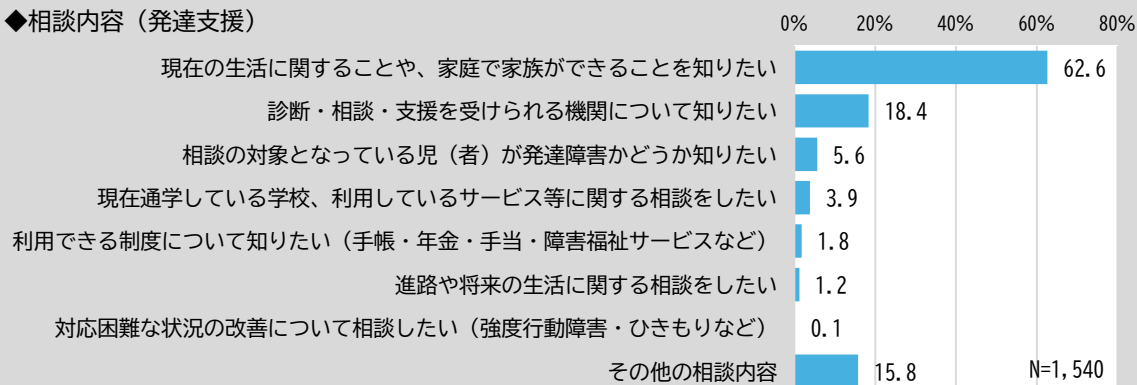
#### ◆相談者の年齢（就労支援）



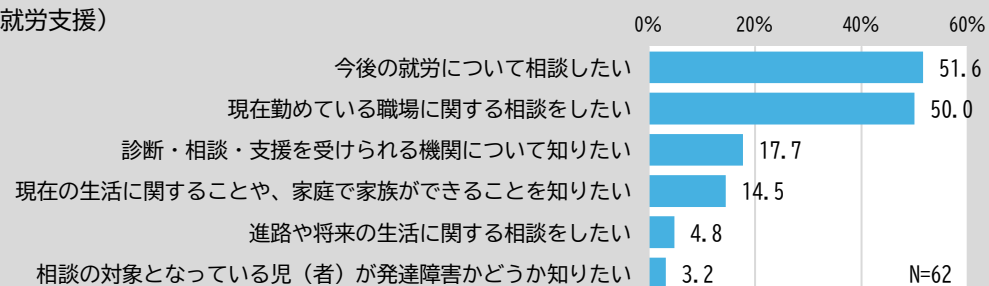
#### 主な相談内容

相談内容について、発達支援では「現在の生活に関することや、家庭で家族ができることを知りたい」が62.6%と最も高く、次いで、「診断・相談・支援を受けられる機関について知りたい」が18.4%となっています。就労支援では「今後の就労について相談したい」が51.6%と最も高く、次いで「現在勤めている職場に関する相談をしたい」が50.0%となっています。

#### ◆相談内容（発達支援）



#### ◆相談内容（就労支援）



※相談内容は一件の相談が複数の相談内容分類に該当している場合がある。％は相談支援・発達支援の全相談件数に対する比率を示す。

## 利用者の状況② 事業所からみた現状・課題

### 先を見通したこどもの支援

- ・ 支援学級、普通学級に通っているこどもなど、将来一般社会に出ていかないといけないうこどもが、放課後等デイサービスで預かりのような支援しか受けていないと、18歳の壁がより高くなるのではと思われる。
- ・ 保護者は、こどもが小さいときから、本人が18歳になったときを見据えて支援を考えていけるとよい。
- ・ 支援員なども、どこまで対象のこどもが18歳になった時を想像できているか。その場しのぎの支援も見られる。
- ・ 保護者が、最低限自立して生活していくための基礎（適切なコミュニケーションが取れるとか、感情のコントロールができるとか）がいつまでにできていればいかなどイメージできるとよいのではないか。
- ・ 市として方針を統一し、どこに相談しても18歳の節目など先を見据えて目標立てていきましょうという体制になるとよい。
- ・ 地域の場合としては学童保育があるが、学童保育は人の入れ替わりも激しい。障がい特性があると理解していない支援員もいる。
- ・ 放課後等デイサービスと学童保育の併用にあたっては、学童支援員等の障がいに対する理解がないとトラブルにつながることも考えられるため、障がい理解の向上が大切。

### 大人の発達障がい

- ・ 相談の半分以上は大人。
- ・ 大学入学、仕事、一人暮らしなど始めて、生きづらさを感じて相談になるケースが多い
- ・ 重度の人は早期に福祉につながるが、そこから漏れてしまった人が大人になってから生きづらさを感じ、相談に来る。
- ・ 過去をたどると、ここで支援にひっかかってよかったのというタイミングがいくつかあることが多い。保育園などは最近特に意識が高いが、それが進級、進学タイミングで進級、進学先にどれだけ共有されているか。
- ・ 病院を知りたい、手帳や年金の制度を知りたいという問い合わせが多い。手帳などは市町村につなぐことになるので、市町村で受けもらえるのが理想。そのほかは具体的な困りごとの相談、職場の人間関係、忘れ物が多い、朝起きられない、金銭トラブル、ギャンブルなどの問い合わせもある。
- ・ 就職氷河期世代（40、50代）の相談もある。本人の特性の問題もあり、アルバイトなどを転々としているケースが多い。なにかしら発達障がいのもとにありそうなケースは、医療や福祉につないでいる
- ・ 就労の相談だと、ハローワーク、ヤングジョブあいち、あいち労働総合支援フロア、愛知障害者職業センター（ジョブコーチの相談など）、ようわ、相談支援センターなど、金銭管理の相談だと、社協の日常生活自立支援事業につないだりして対応している。

### 当事者団体、居場所

- ・ 当事者が集まる会がないかの問い合わせが一定程度あり。当事者から、同じような悩みを抱えた人、家族から、友達ができる場、など。
- ・ 障がい者支援センターで紹介できる場所はなく、各市町村などに聞いてほしいと投げている。
- ・ 当事者だけでやるのは難しいと思われるので、どこかがサポートする必要があると思う。サロンなのか、居場所のようなどころなのか。

## 09 春日井若者サポートステーションへの相談者の状況

### 春日井若者サポートステーションとは

若者サポートステーションは、厚生労働省の認定事業。厚生労働省が委託した民間団体等が運営する、15歳～49歳の働きたい若者を対象とした無料の就労支援機関。カウンセリング、職場体験、コミュニケーション訓練を通じて、就職活動の準備から職場定着まで、個別に寄り添ってバックアップします。「春日井若者サポートステーション」（はるサポ）は、特定非営利活動法人ワーカーズコープが受託しています。



出典：春日井若者サポートステーションホームページ

### 利用者の状況

#### 利用者について

- ・ハローワークは、自分で求人を選んで応募できるような、準備ができている人向けだが、サポステは、準備したい人、自分に何があるのか迷っている人。ハローワークに行ったけれど、志望が定まらず、サポステを紹介された人もいる。
- ・個別担当で、時間を取りながら伴走支援していく。
- ・1か月200件くらいの相談がある（新規、継続含めて）。予約制で1枠50分で対応している。
- ・相談者の半分以上が10代、20代。学校への啓発にも行っていて、学校から、卒業後の進路が決まらず次のつなぎ先がなく、相談に繋がることも多い。
- ・相談は、ひきこもり、就活がうまくいかない人、再就職など様々。
- ・相談時点で手帳を持っていたり、医療や福祉につながっている（クリニック受診、自立支援、手帳など）のは1割くらい。困り感や悩みを聞いていく中で、医療や福祉につながるのが2割くらいである。
- ・障がい者雇用や福祉的就労ではなく、一般就労希望の人もいる。

## 春日井若者サポートステーションからみた現状・課題

### 職場体験、スモールステップできる場

- ・スモールステップからの採用（週1回とか）を受け入れてくれるところがあるとありがたいが、最低でも法定雇用率を満たす週20時間でないと難しい。週1回の障がい者数人あわせてで、法定雇用率に算定できる制度などがあるとありがたいが、福祉的就労との間が大きい。
- ・職場体験が就職につながるならよいが、人手不足で困っているような中小企業だと、職場体験は忙しくて受けてもらえない。
- ・企業もボランティアでは難しいと思うので、体験に協力してくれる企業を支援するような仕組みがあるとよい。
- ・行政が職場体験の場を提供してくれるとよい。（できれば少しでも給料が発生するとなおよい）
- ・レストランやカフェなどの委託業務で、契約内容としてジョブトレや職場体験を受け入れることを条件にできないか。

### 就労後の支援

- ・福祉サービスと違って期間の縛りはないので、就労後も定着支援を行っている
- ・福祉の就労定着支援を利用していたが、3年の期間が終わって、再度サポートステーションにつながった人もいた。
- ・企業も支援が入っていると安心だと思うが、将来的には企業に学んでもらって、支援がなくても自分でやっていけるようになってもらいたい。

### 他機関との連携

- ・学校との勉強会を開催し、学校にも出張面談に行くことになった。
- ・放課後等デイサービスや、自立援助ホームとの勉強会も開催し、就職に繋がった人もいた。
- ・ノキタプレイスやあいゆの森など、ステップアップサポート事業との連携もある。
- ・まあるや就労移行支援事業所と連携して、ケース会議を開催することもある。